

瑞鳳殿

伊達政宗公が眠る瑞鳳殿の静かな丘の中腹の敷地へと続く坂道では、古い杉の木の陰から光が差し込みます。瑞鳳殿は非常に広く、伊達家の先祖代々の墓地が広がります。凝った彫刻が施された豪華な霊廟は、初代千代藩主である政宗（1567-1636 年）だけでなく、政宗の子孫の忠宗（1599-1658 年）や綱宗（1640-1711 年）も祀ったものです。敷地内には複数の記念館があり、刀や兜などの発掘調査時の出土品が展示されている資料館も併設されています。

瑞鳳殿霊屋

瑞鳳殿に入ると、金箔が貼られた伊達家の紋章が施された、屋根付きの閉じた黒色の門に到着します。これが、政宗公の霊廟へと通じる正面入り口である涅槃門（ねはんもん）です。涅槃門は悟りと、この世からあの世への霊の通過を象徴しています。複雑に彫られた花と麒麟という幸運を呼ぶ架空の生物の模様が切妻屋根と扉の間の空間を飾っています。麒麟は、ユニコーンのような特性を備えた想像上の獣で、優れた統治者の到来の先触れであると信じられています。

門の上には、石灯籠が配された急な階段が中庭に面した拝殿へと続いています。中庭を過ぎて最後の門をくぐると、漆黒の霊廟が建っています。中央にある 2 枚の扉には贅沢

な金箔が、軒下には鮮やかな彫刻が施されています。各扉には、伊達家の最も象徴的な家紋である、竹に囲まれた 2 羽のすずめの金箔絵柄が施されています。この家紋は、街のあちこちで目にすることができます。霊廟には政宗公の御木像が安置されており、政宗公の命日（5 月 24 日）などの特別な日には扉が開かれ、御木像を目にすることができます。

1636 年に伊達政宗が都において 70 歳で亡くなった後、遺体は江戸（現在の東京）から仙台まで輿で運ばれ、現在建つ霊廟に安置されました。この霊廟は、第二次世界大戦時に破壊された建物を再建したものです。再建作業の初期に行われた考古学的発掘調査では、政宗公の遺骨とともに数々の副葬品が見つっています。政宗公の副葬品は仙台市博物館に展示されていますが、第二代および第三代仙台藩主であった忠宗と綱宗の副葬品については、瑞鳳殿資料館で見ることができます。

感仙殿（かんせんでん）と善応殿（ぜんのおうでん）

涅槃門からは、森に覆われた境内の道を進んでいくと、大きな慰霊碑にたどり着きます。

この戊辰戦争弔魂碑は、天皇支配を復活させ徳川幕府を終わらせた戊辰戦争（1868-1869 年）の戦死者を慰霊しています。戊辰戦争弔魂碑の先には、感仙殿と善応殿があります。感仙殿と善応殿は、他の仙台藩主の墓が並ぶ小さな墓地、妙雲界廟（みょうう

んかいびょう) の隣に並ぶ建物です。

感仙殿は、政宗の2番目の息子である忠宗（1599–1658年）の埋葬地に建てられています。第二代仙台藩主であった忠宗は寛永総検地を実施し、仙台藩の産業強化と繁栄の功績が評されています。

善応殿は、忠宗の6番目の息子で第三代仙台藩主であった綱宗（1640–1711年）を讃えるものです。綱宗は芸術家として今なお評価が高く、書道や北日本の風景を描いた水墨画が有名です。いずれの霊屋にも瑞鳳殿の華やかさが漂っています。